

Hemingway とその Humanism

片 岡 博 子

The Old Man and the Sea でノーベル賞を得た Ernest Hemingway は、William Faulkner と共にアメリカ文壇の最高峰とされている。Hemingway は、第一次世界大戦に参加し、イタリア戦線で重傷を負い、戦後そこに生まれた幻滅と nihilism から文学的出発を始めた。そして、そこから価値ある何ものかを求めて、否定から肯定へと、ひたすら進んで行つた。後の作品は、時代と共に歩いてきた彼自身の姿を描いたもの（事実をそのままではない）であるが、それらは虚無思想によつて貫かれている。しかし、彼の作品の真価を認めることのできる初期の作の中でも、Hemingway の名を不朽のものにしたと云われる *A Farewell to Arms* から *For Whom the Bell Tolls* を経て、最近作 *The Old Man and The Sea* を見る場合、懐疑と虚無を乗り越え、勇気と忍耐力を持つに至つた老人 Santiago に見出だされるものは、すでに、*A Farewell to Arms* において期待しうるところのものである。ここに、*The Old Man and the Sea* の主題でもある humanism の精神が、どのように描かれており、それは *A Farewell to Arms* の中に、どのような形で存在するか、ということを取りあげてゆきたい。

‘But man is not made for defeat,’ he said. ‘A man can be destroyed but not defeated.’¹⁾ *The Old Man and the Sea* のこの老漁夫 Santiago の呟きこそ、Hemingway の humanist たる面を最もよく表わしたことばである。これは、運命の力には負けるが、最後まで戦うことにより敗北を単なる敗北とせず、勝利に連なるものにまで高めることができるという不滅の人間性の尊さを云つている。この story 全体にみなぎる不屈の精神、即ち、ぎりぎりの立場

1) Ernest Hemingway. *The Old man and the Sea*. New York, Scribner's, 1952. p.114.

に追われた人間の勇気と忍耐を描くことにより、人間の真実の姿を示し、人間精神の高さを強調している。I will show him what a man can do and what a man endure.²⁾ Santiago の激しい行動力と驚くべきストイックな忍耐を見る時、Hemingway の作品について、しばしば云われるように、救いが無いなどということはできない。そこには、彼の人間への愛がある。

The Old Man and the Sea は孤独な老漁夫 Santiago が84日間の不漁に会い85日目に運命をかけて出漁し、激しい苦闘の末、巨大な marlin を獲るが、帰途、鮫のために食い荒され、港に着いた時には白い骸骨だけになつていて、という単純な筋立ての物語であるが、この中で、Hemingway は、緊張している状態の人間の崇高さ美しさと共に、そうゆう状態の時に真の人間性が最高の形で表われるのだということを確信している。そして彼は、常にそのような立場に主人公をおいてきた。従つて、それは主人公と同様の激しい興奮をもつて読者に迫ってくる。Hemingway の全作品に共通の不幸と苦痛と暴力は、短篇 *The Battler* をはじめ *The Killers* や *Indian Camp* 等にも息苦しいまでに迫りくるものを見ることができ、*The Old Man and the Sea* において、美と重厚さを加えて見事なまとまりを見せている。このように、人生を肯定し、未来に希望をもつことのできる人間こそ、多くの作品過程をもつ Hemingway が到達した理想像であつた。ここに我々は humanism の力強い表われを見ることができ、

Hemingway の初期の作品で、文学的には後期の作品よりも高く評価されている *A Farewell to Arms*、これは虚無思想が全篇を覆つていて、作者の人生観のきびしさを知ることができるが、この小説においてすら、humanism の観点に立つて書かれた点で *The Old Man and the Sea* と同じ意義をもっている。

A Farewell to Arms は戦争を背景にしたロマンチックな恋愛小説のように考えられている。実際に、この小説の中の恋愛は感覚的であり、肉体的、衝動的且つ単純極まりないものである。Henry と Catherine の恋は、最初はカード遊

2) *Ibid.* p.73.

びのようなものだつた。彼らは楽しさと喜びに充ちていて、そこには、我々が戦場に芽生える恋に見出だす何らの pathos も見出だすことはできない。いつ葬られるかも知れないという不安な前途であるにも拘らず、如何なる深刻なあがきも見られない。彼らは未来について、とやかく考えない。過去と未来から隔離されたこの現在に、瞬間的に生きているのである。従つて、戦争による制約にも縛られない幸福に充ちた恋人同志に見えるが、その喜びが虚無思想に発するものであつてみれば、そこに運命的な何かを暗示せずにはおかない。それは虚無感に基づく瞬間的な喜びであつて、表面的には倅せそうな彼等の背後に、悲劇的な兆が潜在しているのをしばしば発見する。

'It's raining hard.'

'And you'll always love me, won't you?'

'Yes.'

'And the rain won't make any difference?'

'No.'

'That's good. Because I'm afraid of the rain.'

'Why?' I was sleepy. Outside the rain was falling steadily.

'I don't know, darling. I've always been afraid of the rain.'

'I like it'

'I like to walk in it. But it's very hard on loving.'

'I'll love you always.'

'I'll love you in the rain and in the snow and in the hail and—
what else is there?'³⁾

彼等の遊戯的恋愛は次第に真実の恋に変つて行つた。彼等はお互いの愛が純粹なものであることを知ると、それを永久に保つて行こうとするため、愛の絆が何者かによつて断たれることを非常に恐れた。二人の人間が互いの愛を認識し合うとそれは絶頂であり、その後には、その愛を破壊する何か必ず存在しているのである。それがお互いでない時には、自然や運命がそれをもたらす。彼等の純粹な愛は残酷な現実面に直面する。Catherine は妊娠し、難産のために死に至る。Catherine が悶え苦しんでいる時 Henry は心の中で悲痛に叫ぶ。

Poor, poor dear Cat. And this was the price you paid for sleeping together. This was the end of the trap. This was what people got

3) Ernest Hemingway. *A Farewell to Arms*. London, Jonathan Cape, 1953. pp. 128—129.

for loving each other. Thank God for gass, anyway. What must it have been like before these were anaesthetics? Once it started they were in the mill-race. Catherine had a good time in the time of pregnancy. It wasn't bad. She was hardly ever sick. She was not awfully uncomfortable untill toward the last. So now they got her in the end. You never got away with anything.⁴⁾

神さえ信ずることができない彼等にとって、二人の愛こそ身をもつて信じることのできる唯一のものであつた。Catherine をして Henry に 'You're my religion. You're all I've got.'⁵⁾ と云わせた程である。

Henry に生への希望を持たせた恋ですら、無慈悲な現実のために打ち砕かれた。遂に最後のものにまで裏切られ、絶望の谷間に突き落された Henry の心は、虚無感に充ちている。

この最後の場面で、Hemingway が恋愛は悲劇に終ることを示していることを認めないわけにはいかない。しかも男女は、お互いを愛さずにはおられない原始的本能を持つている。従つて恋愛には悲劇的結末の到来が決定的である。死を避けることのできない二人が恋すると、一方は他の一方より先に死ぬのは必然的であり、彼等の愛が純粹であればある程、その衝撃は大きい。一方が死んだ時、現実に於ける二人の絆は永久に断たれる。Hemingway 自身3年後に、恋愛が happy end には決してならないという意味のことを *Death in the Afternoon* の中で云つているが、P. Young はその著書の中で、'Love is a possibility only for the two who can not love; once again homosexuality intensifies this atmosphere of sterility; ……'⁶⁾ と指摘している。それが悲劇でなくて何であろう。このことは、つきつめれば、如何なる恋愛も二人を不幸へ導き、愛することは不幸への道であることを暗示している。それでは、Hemingway は如何なる恋愛も否定しているのであろうか。J. Atkins は、それについて面白いことを云つている。

So far as Henry's personal experience went love was possible but circumstances always conspired against it and after savouring it you

4) *Ibid.* p.321.

5) *Ibid.* p.118.

6) Philip Young. *Ernest Hemingway*. London, Bell Critical Hand-Books, 1952. p.60.

lost it. So the question remains: Is Love Possible? I asked Hemingway and he answered, 'Every man knows that for himself. For me it is.'⁷⁾

しかしここで、もう一歩進んで考えたい問題は、'Is Love Possible?'ではない。現実の社会に何の望みも抱くことができず、恋愛関係という個人的な関係の中にも、自らの救いを見出ださざるを得ない主人公の姿に注目しよう。

Henry と Catherine の愛は、Henry を戦争から離脱させ、その愛のみに生命をかけさせた。戦争という一つの暴力から逃れることができたのは確かである。しかし、これは社会に背を向け、恋という個人対個人の関係の中に自己を孤立させようとする点で、完全に逃避的であり、ひいては悲劇の様相を呈して来る。この恋が Catherine の死によつて悲劇的結末を遂げる以前に、Henry 自ら悲劇への道を歩いているのである。如何なる恋といえども、社会から隔離されては存在しないし、それは不幸を暗示せずにはおかない。Catherine の愛が献身的であればある程、そしてまた、Henry がこの恋の中に生の価値の一切を見出だしている、その哀しさが感じられればそれだけ、倖せである筈の、また事実倖せに酔つている二人の背後に、常に不安な影がちらつくのを認めないわけにはいかない。その哀しさを彼等が潜在的に意識していることは、二人の会話の中に表われている。

'Why are you afraid of it?'

'I don't know.'

'Tell me.'

'Don't make me.'

'Tell me.'

'No.'

'Tell me.'

'All right. I'm afraid of the rain because sometimes I see me dead in it.'

'No.'

'And some times I see you dead in it.'⁹⁾

7) John Atkins. *The Art of Ernest Hemingway*. London, Peter Nevel Limited, 1952. p.211.

8) *A Farewell to Arms*. pp.128—129.

9) *Ibid.* p.129.

この愛から純粹さを感じるが故に、悲劇的結末の前兆として注目せずにはおられない。

死という悲しい運命を背負った二人が愛し合えば、その結末は必然的に悲劇をまぬがれない。が、この運命的なものに一つの問題をおくと同時に、もう一つの条件を考えなくてはならぬ。それは現代の複雑な混乱した社会、特に 20 世紀に於いて著しいが、個人的関係が何の障害もなく保たれていても、それは自然による運命的死以前に外的なものによつてしばしば破壊される。戦争がその最たるものであり、戦争という暴力は何の躊躇もなく人を死へ追いやる。このような圧迫のもとでは、人間は絶望的にすくまざるを得ない。

それでは、死に対して人間はどのような態度をとらねばならないであろうか。

All plans are nullified by death. You know that death is waiting so you know that hope is a mirage. Even those people who win their hopes are frustrated in the end for once you have got the thing you want you wish to keep it and that is impossible.¹⁰⁾

Atkins はこう云つているが、人間は運命に甘んずることはできない。彼等は勇気のありつただけで、自らの人生を生きて行かねばならない。それが真の人間である。だが Catherine と楽しい時を過している時にすら、Henry は次のようなことを考える。

If people bring so much courage to this world the world has to kill them to break them, so of course it kills them. The world breaks every one and afterward many are strong at the broken places. But those that will not break it kills. It kills the very good and the very gentle and the very brave impartially. If you are none of these you can be sure it will kill you too but there will be no special hurry.¹¹⁾

Catherineこそ真の勇気をもつた人間であつたが、最後には殺されている。死の床に横わつていながらも、強い力で死に抵抗している。彼女は 'I won't die. I won't let myself die.'¹²⁾ と叫んだ。が、自然は生きようと努力する Catherine を無慈悲にも殺すのである。Henry は、それに対しては無力であつた。

10) Atkins. *Ibid.* pp.135—136.

11) *A Farewell to Arms.* p.252.

12) *Ibid.* p.324.

自然はそれほど残酷である。Catherine が手術を受けている間に、彼の心に浮んだことは次のようなことである。

Once in camp I put a log on top of the fire and it was full of ants. As it commenced to burn, the ant swarmed out and went first towards the centre where the fire was; then turned back and ran toward the end. When there were enough on the end they fell off into the fire. Some got out, their bodies burnt and flattened, and went off not knowing where they were going. But most of them went toward the fire and then back toward the end and swarmed on the cool end and finally fell off into the fire. I remember thinking at the time that it was the end of the world and a splendid chance to be a messiah and lift the log off the fire and throw it out where the ants could get off onto the ground. But I did not do anything but throw a tin cup of water on the log, so that I would have the cup empty to put whisky in before I added water to it. I think the cup of water on the burning log only steamed the ants.¹³⁾

彼が丸太に水をかけるという程度のことしか出来ず、それ以上のこと、即ち彼女を死から救うことは出来なかつたことを意味している。そして、蒸し焼きにされた蟻の中に自分の運命をも見出だしている。Hemingway は「死」を取りあげた作品 *A Natural History of the Dead* の中で、人生の結末一死一に対して苦闘することの無益さを述べている。‘The more sensitive one is to himself or absolute living, the more one is obliged to be frightened at human existence which comes to an end sooner or later, and fatality of his life.’¹⁴⁾ そして人間は、このような悲劇的空しさのもとで、生存を続けねばならない。

Henry と Catherine の場合には、戦争で表わされる人工的暴力からは逃れることができたが、自然の暴力の前にたたきつぶされたのである。しかし、Atkins は精神的愛について強調している。

If one of the partners dies then, of course, without any sense of hereafter, the love stops. But the past love is not dead, it is still lodged in the personality. The great happiness that spreads through you after loving is never entirely dispersed. If the woman dies then the man will mourn her but the love he has known will still be part

13) *Ibid.* pp.329—330.

14) Ernest Hemingway. ‘A Natural History of the Dead.’ *The First Forty-Nine Stories*. London, Jonathan Cape, 1956. p.542.

of him, more than a memory, something actually woven into his spirit. Even if she leaves you for another, the same is true because it has become part of you and cannot be taken away. He states this doctrine explicitly in *Green Hills of Africa*.¹⁵⁾

これは恋愛の悲劇性に対する救いの如く感じられ、*For Whom the Bell Tolls* の last scene で Robert Jordan は Maria に、“As long as there is one of us there is both of us.”¹⁶⁾ と云い彼女を去らせる。これは、Maria の自由な運命に自分の幸福を見ようとする、即ち、彼の死によつて幸福は終らないという無限の悲しみをたたえた勇気だとみることにも出来るし、Hemingway 自身それを強調しているように思える。だが、*A Farewell to Arms* においては、この容易な解決は当てはまらない。それは、あまりに単純な見解である。時の経過と共に Henry の悲歎は薄れ、Catherine への愛を支えとして新しい人生へスタートすることもできよう。しかし一方の死によつて訪れた耐えられない孤独感はきびしいものである。最後の場面における Henry の絶望と虚無それ自身とも云える姿について考える時、そこに人生のきびしさを感じている作者を見出すことができる。愛の中に生の価値を見出すこと。愛は人生にその高揚をもたらすが、その破滅は人間に孤独をもたらす。この点に於て、P. Young の云うように Jordan のことばは、人間の卒直な告白ではない。そしてまた、Young はこのようにも付け加えている。

The man seems to be forcing himself, to be forcing something that does not come naturally and is thus not wholly his own. And he must apologize for it: his brief is “true no matter how trite it sounded”, he tells himself, and this is surely an obscure kind of admission that even he senses that something is wrong. Hemingway seems involved here in a difficulty he had referred to years before, the difficulty of “knowing what you really felt, rather than what you were supposed to feel, and had been taught to feel.”¹⁷⁾

A Farewell to Arms の Henry の姿にこそ、人間の真実を見ることが出来るのである。

15) Atkins. *Ibid.* p.216.

16) Ernest Hemingway. *For Whom the Bell Tolls*. London, Jonathan Cape, 1954. p.435.

17) Young. *Ibid.* p.78

人間は、このような悲劇的宿命を逃れることができないとすると、Hemingway は、虚無的な絶望的現代は、努力して生きてゆく価値はないと云っているのであろうか。初期の作品では、多く人間に対して軽蔑的態度をとっているように見えるが、それは彼の真髓ではなく、彼は人間を愛し信頼し、この世の中に生きる価値を見出だそうと努力している。多くの作品に「死」を取り扱っているのも、彼が人生の価値を真に知り、「死」の問題と取り組むことにより、「生」の意義を認識しようとするにほかならない。Hemingway にとって「死」こそ「生」の意味を確実な微妙な方法で、理解させてくれるものであつた。彼の疑いと否定は、人間への不信から来るのではなく、人間性の追求に起因するのであり、彼は新しい意味での人間愛を持つていた。彼は新しい humanism の観点で Henry や Catherine を描いている。従つて残酷な現実について述べていても、人生のよい面を語ることも忘れていない。虚無感をもつた Henry でさえ、自然を見る健康な眼を持つている。

I looked to the north at the two ranges of mountains, green and dark to the snow-line and then white and lovely in the sun. Then as the road mounted along the ridge, I saw a third range of mountains, higher snow mountains, that looked chalkly white and furrowed, with strange planes, and then there were mountains for off beyond all these, that you could hardly tell if you really saw.¹⁸⁾

作者は Catherine の性格について説明的には触れていないが、理想化された heroine として描れていることは *For Whom the Bell Tolls* の Maria と同様であり、romantic 思想の一端がうかがえる。特に、Henry と Catherine との恋は、sex に基いたものから、除々に精神的なものへと純化されていく。その上この物語の終り、出産の結果が悪く、Catherine が苦しむ時の Henry の叫びは、無神論者にも拘らず神への祈りに通ずるものがある。

Don't let her die. Oh, God, please don't let her die. I'll do anything for you if you wan't let her die. Please, please, please, dear God, don't let her die. Dear God, don't let her die. Please, please, please don't let her die. God, please make her not die. I'll do anything you say if you don't let her die. You took the baby but don't let her die — that was all right but don't let her die. Please, please, dear God, don't let her die.¹⁹⁾

18) *A Farewell to Arms*. p.49.

19) *Ibid.* p.332.

二人共、如何なる宗教をも信じていない。彼等は宗教を否定している。

‘There’s no way to be married except by church or state. We are married privately. You see, darling, it would mean everything to me if I had any religion. But I haven’t any religion.’

‘You gave me the Saint Anthony.’

‘That was for luck. Some one gave it to me.’

‘Then nothing worries you?’

‘Only being sent away from you. You’re my religion. You’re all I’ve got.’²⁰⁾

また Henry と牧師との会話、

‘You understand, but you do not love God.’

‘No.’

‘You do not love Him at all?’ he asked.

‘I am afraid of Him in the night sometimes.’

‘You should love him.’

‘I don’t love much.’²¹⁾

Henry は牧師の故郷へ遊びに行くように勧められるが、行かずに酒場へ行く。また、milan の病院で全快し、Catherine と最後の別れを惜しんで駅へ向う途中、教会の前を通るが、Catherine は中に入ることを拒絶する。また彼女は、出産のため入院する時、「宗教は?」ときかれて「ノー。」と答え、死の床でも牧師を呼ぶことを拒絶し、あなただけでよいと Henry に向つて云つている。

では、この Henry の祈りとも云えるものは何を意味するのであろうか。これは、*The Old man and the Sea* で大魚と闘っている際に Santiago が呟く祈りに通ずるものがある。

‘I am not religious,’ he said. ‘But I will say ten Our Fathers and ten Hail Marys that I should catch this fish, and I promise to make a pilgrimage to the Virgine de Cobre if I catch him. That is a promise.’²²⁾

‘I am not religious.’ と彼自身云つているように、「イエスの聖心」や「コーブレの聖処女」の絵を壁にはつてはいるけれども、特に宗教に関心をもつているわけではない。だが彼は Christian である。そして Henry と Catherine

21) *Ibid.* pp.117—118.

22) Ernest Hemingway. *The Old Man and the Sea*. New York, Scribner’s, 1952. p.71.

は宗教を否定しているが、この相互間には共通の感情がある。それは 'religion' ではない何かそれに似たものである。Lionel Trilling は *The Liberal Imagination* の中で、このようなことを云っている。

In speaking of Hemingway and Faulkner I have use the word piety. It is a word that I have chosen with some care and despite the pejorative meanings that nowadays adhere to it, for I wished to avoid the word 'religion,' and piety is not religion, yet I wished too to have religion come to mind as it inevitably must when piety is mentioned.²³⁾

'piety' が 'religion' に源を発していることは確かであるが、両者はやはり区別されるべきものであり、この主人公達の精神的なものにも、この 'piety' ということばをあてはめて考えることは可能なことである。

Hemingway が主人公に、こうした piestic feeling をもたせたということは、彼がきびしい naturalist ではなく、humanist たることを表明している。*A Farewell to Arms* は悲劇ではあるが、救いのない真の悲劇ではない。残酷な数々の場面があり、hero と heroine は厳しい目で描かれてはいるが、そこには作者の人間への信頼がある。虚無と疑いに硬直しながらも、この世に生きようとする意志と勇気を持つている。残酷さの存在、それ自身が救いのない悲劇と同一視されるべきではない。Hemingway の poignancy は人間性に対する彼の強い信頼と愛に発しているのである。

再び last scene について考えよう。作者は、Henry を絶望に追いやるのみであるかにみえるが、これは慰めや同情の代りに、それよりももつと深い人間愛の心から、この現実生き続ける勇気を持つことを期待しているのである。Henry が苦難に打ち克ちながら、'waste land'²⁴⁾ に生きてゆく強い人間たらんことを期待している。このことは、style に於て、あらゆる対象を感情を混えずに書く、客観的作家といわれる Hemingway が、主観的作家をしての一面をも持つていると云えよう。

23) Lionel Trilling. *The Liberal Imagination*. New York, The Viking Press., 1950. P. 299.

24) T. S. Eliot の詩の題名。

このように、Hemingway は人間への愛と信頼に基いてあらゆるものを描いているにも拘らず、20 世紀に於ては、彼の愛と信頼は何の容赦もなく打ち碎かれる。彼は既に、そのことを意識しているため、作中人物に、それに強く耐えてゆく勇気を与えている。しかしそれもまた空しい。この空虚さが人間の運命を象徴している。

その空しさは、*The Old Man and the Sea* に於ても主題の一つとして見ることが出来る。

The Old Man and the Sea の last scene で、老人が marlin の白い骸骨を空しく持ち帰り、lion の夢を見ながら眠りにつくが、この大奮闘の結果の空しさと共に、観光客の一団が、その骸骨を鮫と間違えて噂するという、これは個人に対して周囲が、ひいては社会が如何に無関心であるかということ云わんとする Hemingway の意図であろう。それは皮肉な表現をなされているが、老人の孤独感に一層深いものを与えている。人生に敗れた老人の姿を真正面からのみならず、横の面から強調しているのである。だがこのことは、頼れるものは自分だけという、主体性への自己信頼を物語るものでもある。Santiago の不屈の忍耐精神こそは、*A Farewell to Arms* から *For Whom the Bell Tolls* を経て *The Old Man and the Sea* へと成長して来たものであり、懐疑と nihilism を越えた信念は、lion の夢となつたのである。それは可能性を信じ、未来に希望を抱いた人間の、ふてぶてしいまでの自己信念に徹した姿である。更に、ここで少年 Manolin の重要な役割を付け加えなくてはならない。空しさに耐えることはできても、なお孤独な老人に、我々が「安らぎ」を見出だすことができるのであれば、何くれとなく老人の世話をし、はげまし慰める少年の姿を忘れることはできない。海上での苦闘に際しても老人が思い出すこの少年の存在には Catherine の中に見出だされたと同種のものを感じとることができ、それは、この作品の中に於ける一つの愛の表現である。この少年の存在によつて、悲劇的な最後の場面で、老人の姿に、崇高さの中に可憐さを、孤独の中に安らぎを見ることが出来る。これも、Hemingway の心算であると考えられるが、悲劇感を柔げている。この少年を除いた時、この物語は悲劇性を強め

るであろう。そして、救いのない絶望感が存在するであろう。

もう一つの愛、老人が鳥や魚に感じている兄弟愛である。彼は魚を殺さなくてはならないし、魚は死ぬべき運命にあると考え、愛するものを殺すという罪の意識に悩みはするが、それが現実であることを知る。

You did not kill fish only to keep alive and to sell for food, he thought. You killed him for pride and because you are fisherman. You loved him when he was alive and you loved him after. If you love him, it is not a sin to kill him.²⁵⁾

そして、魚を殺す人間は、殺される魚以上に立派でなくてはならぬと考える。この愛は、海の上での老人の孤独感を除いている。

更に、この物語に生気を与え、人生肯定の象徴ともなっていることは、Santiago が老衰しきつてはいないということである。Marlin が初めて海中から姿を見せた時、それを見る Santiago の「眼」は実にすばらしい。

The line rose slowly and steadily and then the surface of the ocean bulged ahead of the boat and the fish came out. He came out unendingly and water poured from his sides. He was bright in the sun and his head and back were dark purple and in the sun the stripes on his sides showed wide and a light lavender.²⁶⁾

その「眼」の観察力の確かさを暗示するかのよう、初めの部分で老人について他の所は衰えていたが、眼だけは生き生きとしていたことを強調している。これは先にあげた *A Farewell to Arms* の Henry の自然を見る眼に共通するものがあり、ここにも作者の人間信頼の精神が表われていて、それは生の肯定に連なるのである。*A Natural History of the Dead* は「死」をとりあげたものであるが、この中で Mango Park がアフリカ沙漠に倒れて死ぬ以外になかった時でさえ、彼の眼を捕えた「生きている植物」によつて、絶望から生きのびようとした、その勇気は偉大なものである。このように老いた漁夫や虚無感に充ちた Henry に鋭い輝く「眼」を持たせたことは、あくまで人間への愛を強調しようとする Hemingway の象徴的一手段と云えよう。

Hemingway は色々な形で、彼の人間への愛と信頼を強調して来たが、現実

25) *The Old Man and the Sea*. p.116.

26) *Ibid.* p.69.

は悲劇であるとし、その悲劇を悲劇と見て、それに対応する人間の態度の中に一切の人生態度の意義を見出だそうとしている。不安な現代に於ては、人間は懐疑的にならざるを得ないし、そこに生じる nihilism は全く発展性のないものであり、「生」の意義を否定する。そして、行きつくところは死を選ぶか傍観的態度をとるかであるが、傍観的態度をとる期間には限度があり、そこからは、必然的に「生」の意義を求めようとする態度が生じてくる。それは積極的な価値追求の態度と云うことができよう。人生の肯定へと進展し、あらゆる苦悩に打ち克つ行動と忍耐の中に、人間生存の意義を発見する。それには、人間的なもののみがその根柢となりうるのである。そうして懐疑と否定に悩み続けた人間は、新たに人間への信頼と希望を持ち、将来に目を向けるようになる。これは、*A Farewell to Arms* 等の初期の作品に発して、色々の批判はあるにしても人生肯定をはつきりさせた *For Whom the Bell Tolls* を経て、*The Old Man and the Sea* へと発展してゆくのである。

Hemingway の文学に宗教性を見るとすれば、アメリカ文学の歴史を眺める時、puritanism 時代から、rationalism を経て、romanticism 時代が訪れ、更に realism, naturalism 時代へと発展するのであるが、注目すべきことは、この間を通して、キリスト教的信条が引き続き保持されて来たということである。今日に至るまで、キリスト教的倫理は欧米人の日常生活に深く根ざしたものとなつている。Hemingway も、キリスト教を全面的に否定しているわけではなく、彼がそれに通ずるものを持つてゐることは確かであるが、それは倫理としてであり、宗教に救いを求めようとするのではない。

Humanism に基く文学は、あくまで人間性の追求が目的であり、神の追求が目的ではなく、そこには、内面的自我の独立へ向う人間への信念がある。Hemingway の関心の的となるのはどこまでも人間であり、社会とか自然ではない。人間の、社会や自然に対する関係に主眼を注ぐということはせず、社会や自然について一通りの関心は示しても、それらは、人間の行動の場として以上には取り扱われない。*The Old Man and the Sea* において、はじめて自然との対決を見ることができるとは、社会的及び自然的環境を一応度外視して、人間中心に深く掘り下げてゆこうとする方法をとる彼の作品が、しばしば社会性の欠如を指摘される所以である。